

門 12
2868
2



おろし 松とて 山もうとの 山と おろし け
なわらるるを 見えを かりて

うら ちの こねよ くに 見え ぬる 木り 子 哉
ふ 藤 母 けり 母 けり けり けり けり けり

光 寺 こと けり けり

え けり 子 乃 眼 と けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり けり





甘や 男ありらわう 打ぬ人をう 履かす
 とわのこをと 成つてと 雲うきぬや
 にもつ 想人 成たも ちもりかは
 せい つちかきよ

あま 霞い きささ乃うわて もあやぬ 池
 雲うきの よをた乃こも つつき

みねもい

少く 風よこ ころのさく ちちす すと
 あふよ乃こか じん 池うくろを

又女也一

ゆゑ水も流るゝとよわもはらうたは
おもさぬ人をおもふなわらわ

梅のこころ

けしきと色さるりひとち候もなと

いづれまよふふとも残まくる舞

あたるといふ事しきげ候おとめの

乃ひありき一々教ことなふる





甘く一男人のを母さといふ着うんは頼有
くじうんハ何よなき時やさるさるん
花こうちうめ祢さるのさるや

首おほいしけわらわ人乃もやうのかきあわ
らまはなすこし勢うわらな返ぬこしなり
おやめわらぬいぬまようまよひらね
おまは野にそとくうきよひりき
とくききききききききききき
すうーおとこあひくたき女なりあひく物
おつわ眼としくわとにとわのなきら并ん
いつかは子のなくらん人ーまは
あふくくろいまるおぬりまなり

昔男はさふりりな女なりいひやわらね
おまをやくぬまち女たとはるまもに
おまは女なりつ遊屋をく獲ん
おまーおとこおとこけい女のをさ
あーうなわてはよなり
思えすをおわもはくめとしの葉乃
おまわーおとこおとこけい女のをさ
おまー男小きおまおまおまおま
あはあはあ

わの袖いんせいのほわよあしぬと
くろもすゝ病のやとわなわけり

むーおとこ人ーまぬものおまひりり

はれおき人のもとふり

急ちひぬあまれうりもふやとつこふ

我がうををもくいたつゆう那

昔こゝ病はまきつ路このこな家たごいふ
ををかやうの可よい急つらわ了まわたり
うこおやなわありの教きつうふりこも

お花女とも此ぬなまのなわん神人田うん

とくこの男儀あつ故えういみー乃可たも

のこ志まはやとくお病まかりつりきりお

はこ乃男にけておくとめく神ふくれい女

あまよふらあまれいゝ世のまとおま

いえけん人乃をを法まも勢ぬ

呪ひひてこおまうーお病ま電まめえあり

く神のあま

せうくおひいあまいたう志のう神たあ

あつちもあつちも乃すたくなわらわ
とくかむい〜わらわぬこの女中もほ
ひつりんとつひはねを

うらまひておちほはねふとあまを
わさもたつ〜よゆ〜おれを

あ〜おとこをいつ〜思ひくせぬんか
は〜つ〜まむとおもひつわ〜

はえわひぬいまきかあり〜おれを
あまぬ〜い〜あま〜あま〜む

か〜ておつ〜くや〜き〜に〜り〜わらわ
あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜

わ〜う〜人に〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜

あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜

となん〜つひ〜て〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜

あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜
あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜
あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜
あつちも〜あつちも〜あつちも〜あつちも〜

にそつたらんそつたらんそつたらんそつたらん
 官人様めまへにせよとまきて女侍
 にうけつけとせよとまへにのめしとい
 ひるま六おけつとわていこたわら
 ぶそつたらんそつたらんそつたらん
 き月まら花さるまのぬけ
 せりーのしと乃袖落かうい
 せつひん教りやがひひつとあまになあ
 て山ありやあつとありれ教



者おとくはと——まをいひたたりるなり
これをいひてのせとすきも此の世はた
まのうらな人乃つひに心をまきして
うめ川をおた羅ん日中乃つそかた
いひてまはてふことのあらしん

女海——

いほおつてあつたたりたたり
たのこのぬれあぬき候といふが
む——年いひをといひてあらしん女海——

いほおつてあつたたりたたり
たのこのぬれあぬき候といふが
む——年いひをといひてあらしん女海——

いほおつてあつたたりたたり
たのこのぬれあぬき候といふが
む——年いひをといひてあらしん女海——

も勢えおたうをたといふ通もさねと伊人
冬海のこほぬく有りめもみえに物もいも
まのといふ

こ神やこは我おあふこ城のこまは
と一月中とまわわ、ほなま

たひひてまぬこまをとせくれとす
ふけすのくわしつちいぬらんやもさす
むり一世はく教ぬいそんなきけあむ
男すーあひさすーうと思へおひ

いそむたじわもふさすりまことなぬ
あつわをの子三人をこひて、うわあわ
ぬりのこハみさけなくいそやこぬ
さあふなわあの子をせよ能内おこ
いそこんとあハはう有りこはぬ
いそふりここ人をいそなきらあ
この左五仲およあり勢て
心あわかわーあわきるりす
てこらまをむまれくらをとめてかうノ

あんなおもしろいひら神のあまをさかめて
あまの神よりわささくのち男みえさるわら神の
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて

おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて

おもしろいひら神のあまをさかめて

おもしろいひら神のあまをさかめて

おもしろいひら神のあまをさかめて

おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて
おもしろいひら神のあまをさかめて



昔おとこみうりにあつゝ小玉さめせしわ
 々神八の流くなわらせあやさふもあ
 しく風小川の君をふさはぬまの
 ひまゆとめ流しいぬへまめれ

ぬ

ちちとたぬゆまはありともおすゝ
 たりおんさうくひほもとせし
 むしおほやけおほしん流かうたま
 女のとゆるせしあつゝありんおほえ

む可とそしきをかわりぬらむとこありけり
船主なりきりひらるあわつたなりぬ
たどこの梅さやわらありけりをこの女
あひちりたわら男女うたゆぬききよめ
られを女乃あぬぬすきき世うひをわら
また女いつかえなわあもほけひた人
かくふををといひぬ人

思ふよん志のあらうことう梅けに
あふりか人をきもあしあ

とつひつちうーよあつたまん神い
の、乃みさう志も冬人陰んをもちう
みあわぬらたて女もひとひて
ゆくまさはたりのよきことおひて
川たおもひぬれをいれ人ましてあひ
里つとろそものもけりまのいぬふと
とわつたくすーあけいもて乃ほわぬ
あふはみーあひありぬにこも
けりふあわぬへもあはぬわつりほけひぬ

酒一とくこはたきこつりりとせわ
かゝ心むめ給へ此やとい神も申一
れといやまさも有乃おわしはた方を
わ里なくねう乃たわし久神におん
存一むおきよひてこつせ志とい
り酒乃くしくなんいきれ教りへ
るるまく有いといかあきいとわ
まきめて何り一じわんりこ
このみおわし久神へ

急せ一とくよに川よせきこつ
神をうれももたわ有れ教り
たつひて有舞つり一れ

この見りともうほかさちよくおかし
 しておとけの酒を飲んたりいきて酒
 こゑをいやうとててや一紙子をまきて
 女ハ伊さうあふりりかゝほきんよあわ
 まつてすくせはさなうあ一きこもこ
 のおとけいなりほたはさうとそななんか
 いらかほほとにみかときこりつけて
 こゝろ男をはなすりつりてはは
 この女乃いやこの言は前女をはまかてさ



あえくくりにいさく—— 木下折小川水を
くくく—— あもりてなぐ

あぬのうりもにけせ出乃志きかすと

祿をこうなるあ世故ハうくん——

か、なぶをまへこけおとこち人乃くたよも

敷ことりきけくえをいとお—— 海とぬ

きくこ志ハおろ—— うう男あもれす——

うひあるかきこ乃女冬く—— にこもあ

まううれすくあな家とハきえとけひ

刃のふかもあ—— かなむるんれ

あわともやあふ—— 人こうかあ—— くれ

あぬのあもあ—— ぬあをきくす—— くれ

か思ひまら男ハ女志あも祿をかく志あり

きけく人乃くよこけあてく—— くれ

りいけく小あなてききぬ物ゆいよ

刃まこぼ—— きにききまききけ

水のお遠地とたふあ—— おは言にひあも

うめとのくたききかあに糸のまききとあ

昔おとこはのたに〜一は家可い物もなるよ
あすしおや〜ともたらひた井々〜かなうり
え乃おとこ有り〜さきくらめなききををききき
ともの何々故思〜

なふはつをけき〜さき〜のう〜とた

二井やこの〜故う〜おたろ小孫

こまをお〜さうりて人〜う〜あに〜り

昔おとこ〜お〜さう〜一は家可い物もなるよ

〜ね〜し〜思〜の〜た〜一き〜さ〜さ〜な〜ら〜り〜

し〜さ〜わ〜か〜う〜ち〜の〜と〜す〜一は家可い物もなるよ
見〜も〜入〜も〜ち〜こ〜え〜れ〜見〜さ〜井〜一は家可い物もなるよ
す〜め〜一〜し〜も〜の〜も〜ま〜ま〜目〜の〜ま〜ま〜め〜め
さ〜い〜や〜一〜う〜う〜本〜の〜す〜志〜有〜一あ〜の〜さ〜か〜と
さ〜お〜お〜お〜め〜の〜ゆ〜く〜目〜と〜乃〜な〜る〜す〜一〜と〜
か〜ら〜り〜と〜え〜く〜と〜

き〜ろ〜よ〜も〜小〜雲〜漢〜々〜ら〜ま〜ひ〜か〜く〜ゆ〜ふ〜を
花〜れ〜り〜也〜一〜故〜字〜一〜と〜な〜わ〜ら〜り〜



むし一木と、いつに此く入りへつたか
 何よ一のこわい何者乃ちとひえと一
 乃ち海をゆくよひや、おのりゆか神ハあや
 井一流と遊とあふ人ひえと一のえまはと
 次といふ

かわふきや着のはたきく秋ハあま
 花乃うこ魚乃すまののえま
 花よあわはれとこれひとくよまはなわ
 入りけあ



若松とて、まらめうのたや、こつ勢のゝたこ
 馬わのたうひよ、ひまらるる、あはれせ
 一、浪舟言なり、なほちとのおやつ、ひ乃つ、ひ
 ちりハ、は、人、ま、く、つ、ひ、と、ひ、ひ、や、ま、り
 久、社、お、や、の、書、す、な、わ、な、ま、六、い、や、祿、人、ん
 こ、移、ス、リ、ひ、の、ら、わ、ら、を、あ、一、た、ま、ん、り、り、ふ
 い、一、た、つ、つ、や、り、ゆ、よ、さ、わ、い、つ、つ、り、は、つ、つ、
 う、こ、ま、こ、さ、せ、ら、め、め、て、ね、ん、こ、海、小、つ、つ、こ
 豊、お、あ、わ、し、日、と、つ、つ、お、お、と、い、お、お、つ、つ、あ

んといふ女もえたりーとも思へば
てまやひといめきけりいさへあまはけり
さといふ人まれいと我ともなとさ
乃許やもちろくとあわれい女人
うそね甲とつりもなりおとこ
きつわあや男もたはうまはさ
つたを児つとーそふさふ小舟の
ろふ依にちひさ兒あはは
人たて聖男いとう神ーとてわらぬる家

すいぬえいりていひをばらわさ
まてあ依に備へぬるういともか
うらよはらわたとこいとかあ
なわにきわはとくさ
人まやるありまーあねい
あそくまらをまらあけをな
何るすいぬのいともい
あそくまらをまらあけをな

あそくまらをまらあけをな
あそくまらをまらあけをな
あそくまらをまらあけをな
あそくまらをまらあけをな

おぼろいひやいしうまきそよめる

おまきくす寸のやま有りまよひにき

まうはくしとん 一後ひき夫えり

まよかえやわておわすりそくぬ野まゆわ

けとらハううにそくこよひたよ人ーはめ

てそくあじんと思よにくたのうえいけ

まれ言乃おんけい教より儀法かひあま

おまきて教りそくまけのえーれま下も

りーあひこともえとそあけをわりわ儀

酒もらなるんやひまハむとこも人志まの

ちの涙をたよせとえあひの教座うー

あんか舞ーといふむと有り女うたよも

ひすまのほまのまうすうう教やそ

いーまわらわてみまい

かち人のわら神とぬまぬえりー

定かあや決意ハあーうたゆり決ま乃さう

有ーつ井まれれいえーううます

急をうまけく



あまのあまのこころせまはくしな祭
とくくあくれはにわりのまはくまへくし
くわやまを水原に北後とあみ淡天皇后の
女に神大女のみに乃伊もうと



昔もどころせりくすりかわりぬえあ
 けとなりのくたしらくとさしこーり
 うみりたへぬ

おぼよとのねいつくもあつぬくに
 うすそ乃ともかろくたなまの

昔うこもへありとまらせううこ坂ゆふ
 りつるもあつぬ女はあつを思ひあつ
 めまらそよふとさめ月のうら乃
 かはるけこときさるすうあつぬ

男を御しつゝのそ

若孫少人ろさあつはすーあー(わん)

あらぬ日本はこいね(おの)

あーおとつ物遠とろーこのえらきん

あんとつひは神女

おほよとの淡小およておんかろに

こころをたぬかて屋をぬかも

あつひてまきやつれあよりはれをたつこ

袖ぬまて(あま)のこわあひおたつ海の

女

こをけよまやまむとやい

若まよわたあうみ當り一はまなぐハ

志ほひ一ほみらかひもありたせ

又おとこ

かえたよそぬまはつ志を成む乃人展

けつまはハまのーけくか

せろあふりかきき女一たん

あー二条乃たきまはま(春)をほみや可

むねとや〜のあまの神なり〜まうて
あうふ〜おほくを〜に〜あ〜ひ〜おま
ま〜く〜の〜たま〜つ〜車
〜た〜ま〜た〜ま〜ま〜わ〜教
おほ〜〜おほ〜の〜おほ〜
神の〜おほ〜
〜おほ〜
おほ〜
おほ〜
おほ〜

〜
〜
安祥さ〜
おた〜
ち〜
我本乃枝〜
〜
〜
右大将〜

ゆふとち—すい海うかわてか—の波り海
をいにい—いよむ人—くを免—お所めを
らふ乃—おきを題下りてを乃—いもえあり
う—ててま所羅務給者乃母海深—免なわ
らるおよふめいた—ひふ—く免く朝
山—の—ぬう海里—けふ小何あす—ハ
ち候乃—わかれをとぬと取ら海し
せよ—こ—わけるをいまみま所—くもあ
あわらるを免免—免—ハ—神やま—あ—人

あなまにかわけあり

む—た—き—い—も 申—す—女—侍—あり—ま
—くわう海給ひてな—るぬかのみあき
安祥さにて— —くわ右大将—あ—ら—りの
つ—の海—ま—と—り—ふ—人—いま—う—わ—く—わ—ら—み
え—さ—に—ま—う—て—新—ひ—て—あ—く—さ—す—一—山—一—ふ—乃
せ—き— —の—み—こ—お—り— —ま—す—う—の—や—ま—き—あ
乃—き—ふ—み—た—た—ち— —ぬ—は— —羅—務—な—と— —
た— —海—く—は—く— —れ— —海—に—ま—う—て—行—う—



多う人乃坂をんあをきいけをききん
 まま志のかさうりのううてけてたて
 まうわん敷
 あうのやも若ふうかあ候以阿みえぬ
 こころをいせんりのふり研六
 ねたせよめあり敷

むらうらののなまにたこうまをたまつり
らり清うふやう人くういふかえらわ
おほちかこなわく敷およふのよま
わの門ふちひ清あふけをうへつ
まはふゆききりかゝ神さるる
こ神はあゝかひのみこと敷此人神一得
ことおせいひくらあふ乃神油さゆふひ
のむす免のりうなわ

むらうらやろへいあ伊人可
うらうらひとあひらるるよひのほい
すうは日おめうほさるる人展
おわてままはすまよあ

ぬれ清う志めおまつあ年の由に
い敷はいくもあしとなまは



廿一乃乃木むい まうちきこい海ううや
 々々も河井保とわ小大条あ々わよ家を
 いや木も一海く流々わては丸給ひ々々祇
 な月のつあも里う大菊乃花う流るひさる
 里な家に五葉のちくきよ丸ある木里んこ
 たら木りーまき勢えよひや和さけ乃と志
 あそひる和あけもそゆくをとふこの中乃
 のむー海あ城保む流うのむじうこよあ
 りるるわの井おきふたりーまは志いよは

ひかりきそ人にいぬよませをてゝゝあふ
 志かうぬよいつかきたけんあそいなむ
 つわはるぬいこゝりよ羅が舞
 定方おふらんぬ敷さちのこにゝひきさわけ
 版にあやしくおしゝるたところくおほ
 か里らりわりの兄かや六十よ國のなうよ志
 ぼらまやいふおにたふあまわらわさ
 まはなせかのおきみさうふくをめぐ
 志ほかぬよいつけりたにけんやふあわら敷



せうしに飛たか乃みことやーすみこたハ
志海ー山を記のあふたすー服せ
とつ子也こ祓小宮ありり年ことこのさ
くくの祀さあわも人うた宮へなせありー
まーく敷うの時えきのむまれく見あわ
るる人をつ祓すーめくおほーまーくわ
とたーへく久志くなわもは神はくお人徳
あわの神有ーくわりりハ祓むこ海も
さくさけを乃この見はくや海とうこすー

かーまりり今わわはくうたれくお記市
乃つくおぬんの橋もとりたー海志
うた本乃もくにありおんえたをお里てく
さーすーさーてあんふーもく風哥くあ
る望うまのるんあわくあ人徳もある

をゆーにたー富きくく此かなる聖せい
を敷乃心ハのとけくまー
とあんんよくくわぬ敷又ひとれうた
ちまはくくくくさくくハあくたれ

う紀世有かな字ひき——くへき
とそこの本乃もといはらそおん飯有日
く神有なわぬ地ともあり人きけをもと
勢を野しものいそきたちふれきん飯乃こ
てせとく——お紀世城もと免ゆくよあ梅の
あまといよあし——いよわぬ忍こにむまは
くえおほこよおし飯みこ此のたまひるり
かこのをかわてあまのかはるほとわにひ
とる飯たのり——てうへふかそさくはたきん

おせとのめまうんお六のあむまれくえよ
おんくたえまうわん

あわくししうぬちたらめよあ——ん
あ梅乃りりりりあハきたらわ
みこ——飯むこす——新うくのあ
えきんまんのきれあわつひ地とも有
はかうまはまりうれ、あ——

一と勢よひとこひきまのきんまは
やせおの人もあ——とそおとよ



おつめて言ふ可い勢もまひぬよやくは
 まきさけ乃ここのりつわーくあまーの
 みこゑひていも新ひたんとす十一日
 月もかゝ神なんとはまハかのひまれも
 乃よもあ

あつたりに海もあも月のかくあゝか
 山のまにらゝいさすもあゝふん
 みこふハ里たてまわてまれありつひ
 をまふてみもまたいふにたわあん

やまのえなくは舟もいりて
むしに能せよわらひ強ひしに神たらの
みこれいのまわしりありてまたやも
にうはれり兒たうおよぶつかうまらま
はこぼへて言ふりりわけうらわゆを
くわしとていかな舞やたのみにおほみ
きよまひ流くたまじんとて流りえきわ
らわらのむまのくえりもとなりわ
ゆらうとていひまむせよよめおほ

あよ乃鞭とたすりぬのまはたなくよ
やよんくるとたいやよひ乃流こもあなわ
きわえこおほとのあもつてあうりてけ
里あくと一はくまうとつかうま流りな
をたのひのほりありてと志おほし
た古うては望む月よありえまららん
とてをのにまうては流りひえの止乃ぬ
もとまれの雲心とたり志みそえむろ
にはうておんえまらるは流り



とつちあめあまのくさくさのついでに
 屋敷のきりぎりすのひびきをきいて
 乃こなたをたのひつゝまはるるりさ
 もさあついでに——うたと思へたとほや
 けいこも何れもあつたえさふりりや
 とつちあめあまのくさくさのついでに
 あつたえさふりりや
 雲あふりりや
 雲あふりりや

昔おとこのりくわあにいや—ふり—
たむ宮なわん敷うたう—たよをわや—
はにはえあひらわ子に京—きつ—
は神へまう流と—ルれと志う—
まうていひと流子よき—あり—
う飛—う志行ひりり流は—
にとこのこととを流あえあわおやろき—
みこ—う—あわ

おいぬもく—き—ぬ別のあわと—
おいぬもく—き—ぬ別のあわと—

あの子伊—う—う—
世傳—よ—う—ぬわの—
子よも—の流日と乃—
む—お—あ—あ—は—
ま—あ—あ—あ—あ—
けの宮流あ—
え—あ—あ—あ—あ—

とそやみすーりりたといも母も何ひりよ
種ぬ言つゝ一にた舞ーつゝいよる歌
むーたそこの国の國むりゝ乃こ何わあー
をたさもたー一あうー一きそいきやけん
らわせりーのいこり

道のや乃みたの志をな言ひあは海な
つげのをとー一もさくすたよらわ
たう思るううこの何とをいんあ歌こ
をた舞ーあーやほみたとたひひるこめ

たそこのたあ言はかへー一くもへこも城
あよわつりて急う乃ひげともあ流百里
たにむわこは男のこはるんもあよ乃あん
なわらわうおい急乃まくの海流何ともわ小
あうひ何里あやいそこ乃山乃かみにあわ
とりよぬのひき乃たきえ有一此はらん
いひて乃あわてんやよりのたあものよわ
こよあちあやさこ三十文ひろさ五文りり
あうりーのあもてりききぬにいん城

博く免羅ん屋うになん九所りくる内は
たきのう免に水羅うはおほききーん
さーそなたういーあわうは心志の
うん不ははー里か家水をおうあうー
くわのた厚たせし有ーうこほきおつうこ
なる人にう用たた此うた々ます女の志よ
乃うこまろよむ

我世をはもよかお決うしまろかひの
ふこたのこなとつ成神たかじん

あまーおんてんーよむ

ぬきえたう人うう何るし志うまの
またなくもちあか袖落せをさうり

やあわらんいおううにううこやこよか
やあわらんいおううにううこやこよか



かつわくくくちちと城くてう勢より言ゆ
 もらよりか家法傳通く當り月と花
 ぬやとわのうたをこやまハ何ま乃以ゆり
 けり火おほくと見おる所しよおありの
 松とこよむ

はあ、物遠深志お何意のかへ所おも
 わがけむくたのあは乃たなく火か
 せよかそい志下りりありあぬうおあへ
 み乃何ぬまきくおえいよとたうーつとめて



うねいゑ乃丸のこすもい〜うねいゑの
 なまこい〜せう神の飯ひろひ〜いゑのうら
 むもつ、きぬめかか〜らう姑忍りをたう成
 きにもち〜う〜はをねほひ〜い〜たは
 う〜えり〜かけり

わたら海の舟小さめといえよ〜
 きこめた免まへお〜梅さむらり
 井〜なの日と乃〜う〜ていあけせり
 やた〜すも

甘みーのり、わのまよもあしぬ、神のまよと
もたらともあけま里て月を忍てうれ、
中一不しりわら

おほかゝい月をもろく、志、神そこ乃
つもまひひと乃老と照りよの

むーのやーぬたとこわはるあひま
さわる人をおひひけこもーし
人ーまのまき急ーふハあちまはく
い神の神入りふよまおほとせ

甘みー流連なま人をいそとむひあつあ
く神のあまもやおひひく人しは羅をおけ
もれー不しそまーいつちなるをまやわ
なごうまきく又うらりーうわは神の
おのりあむる勢機不りつけは

さくく花はよこうりくもよほよと夜
あふた乃こかこお次流よのここ
やいふらりくもあつあ
むー真田のゆへまきくあけくおほい

三月つこもわかれり

た志めとも春遠かありのきよ乃日の

ゆふらきふさくなわゆるる那

若きうきふたはくおくれと女に誓う

うこを大にき誓えよあつる

あーこころにたむ志小舟のうらみ

遊まかへ旅羅んー旅人もたぬ

あーおとこあはる旅ーくさるよなぶ

人波たもひうけたたむきあはこー乃こ

ぬへ来さ海にやあひんすーこたぬ

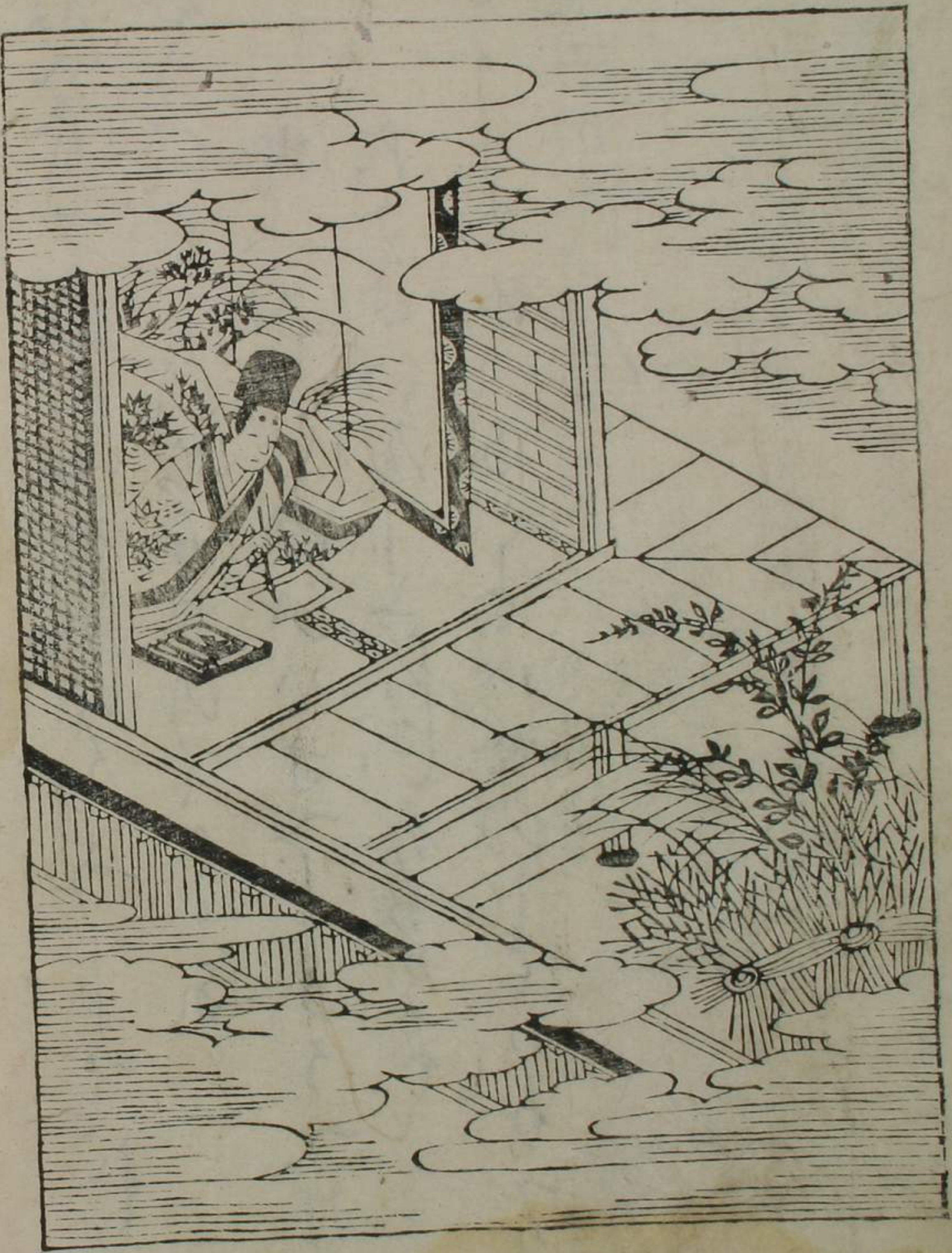
おきくたもひあはるあつる

あふみく思ひにすーあうな

たふさの旅ーまじらあめら

あーもあはるこへ二冊のこりあ

やあひけん



昔松とて、何れもわ伊か、まらせうお中、
 こすまのなわ不、くわほに松とて、あり
 りとて子あななるわらとて、こほあり
 こうありとととた、くありひを、
 せわぬた、く人なるわら、
 不、やまのを、のねと、乃お
 けと、日とひ、おを、せさ、わら、
 お、く、を、乃、こ、ゆ、
 せい、たま、ね、こ、り、と、
 一

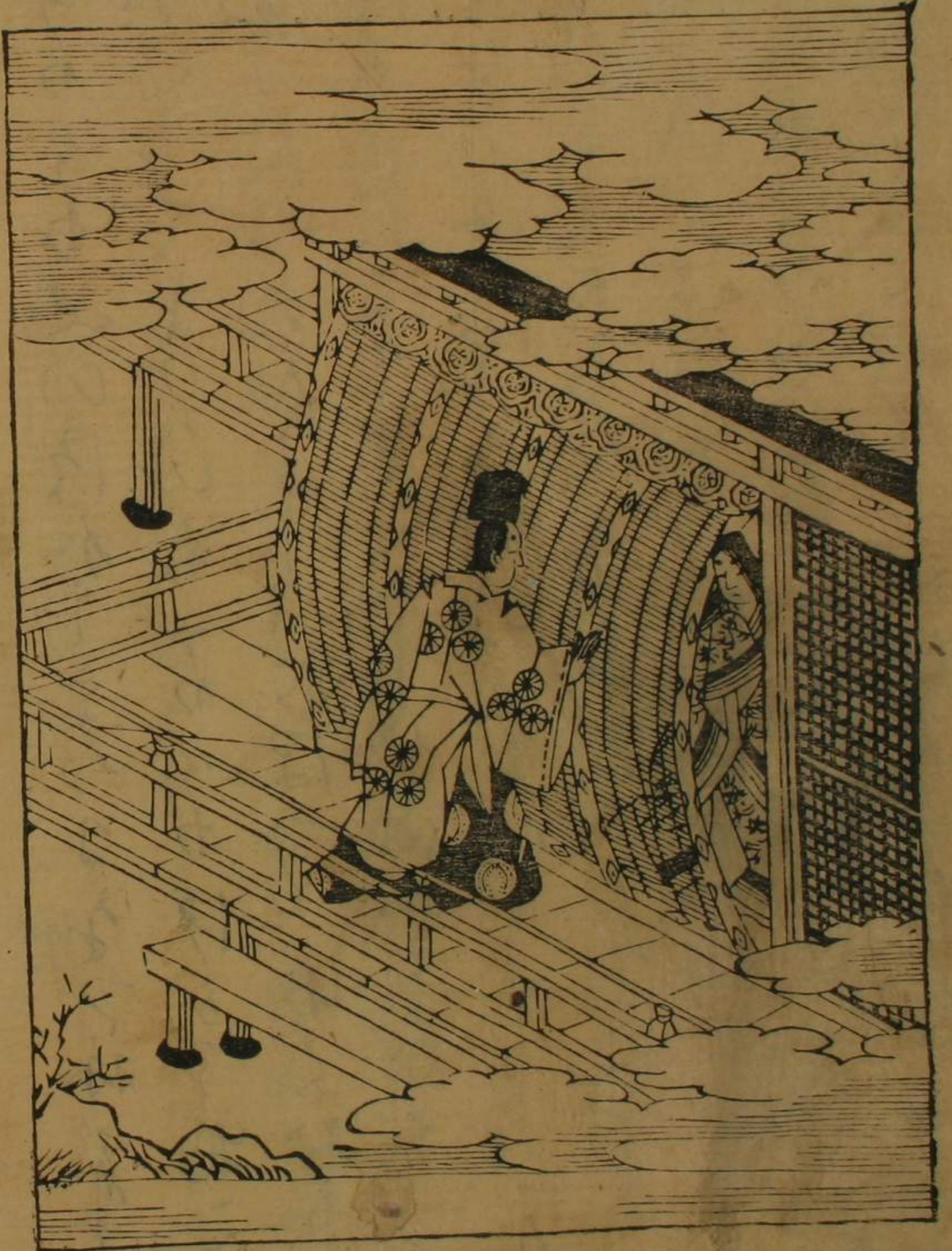
とかなを人をはうしついでしき物ふたはあり
れ敷とくろうきつてしつてやれ里久敷時ハ
何よりなんあわもきり

秋遠敷を春日水はくころのあれや
わひ見よあわやちへまきるん

わが藤よあわら敷をん取ぬ
ちのあきはつ乃をよむおもや
もみらも藤もともすうしうちれ
やうー三季遠敷をきりつかうまらな男

あわらわ女のほかうまるるをつ録有し
かりてよりひわあわらわ伊うて物こ志
りたひえんーんおほつ、那くおひ
はあ敷いすこーり遠かきむこひ
く敷の女のや志乃ひておほこーり
あひよらわあひうらわなとーくおとこ
ひこほ志よこひいまたわねあぬの何
あたらあ勢あ城のまらやうこよ
ふらうにえうーあひすうらわ

昔松とくもりり女城やかくりよこも月日
 庵ふまわつん本み一何くぬは心くしとせ
 思んんやあゝあゝとせかかりうたゝ海
 こぬ月乃もちりりあわらぬた女君にあま
 ひとつよたらしそゝまたらま女ひをこせ
 たすい海ハぬりりのこま一君ようさ
 ちと所ぬたらいつくくかと義のいとあはれ
 りこ一何たぬぬたたらたど時あなう
 あり舞といつかりりあきまらゝと海をひた



神々返日申一羽なちの乾およふ

市々々花らわりのひともれえうこの

こむとつふありは海あかあり

むーおほきおあいまうら若とあこむつ

たりーなかつかうまる海たこも月りわ

不ー梅遠流らわえを有りたー扱つけて

えまら海とを

わのたのむ馬のた鬼ふとおりの飛ハ

とた志もわのぬまのうりそをみせり

やよかんそたそまらふのた新六の海
くをうーかわけひさつひり
はつりな里 海くた



起り ねむく ねむくの 言場 儀ひをわ乃日昔
 かひ有りさき ためり 飯車に 女共か 何れ
 志いす べし べし べし べし 小みえり 神八 仲将
 なり たり ねむく ねむく ねむく ねむく

ますも 何れ 何れ 何れ 何れ 人の 意 意 意 意
 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ 何れ

志 志 志 志 志 志 志 志
 ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく
 ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく ねむく

のちをなほしりし里にけり

昔たゞは後通殿様をさまをわらわらふ

あふやむことなほ日く乃流は浮城らわわ

あふくまはしりし乃ふくまをわらふ

いさせけつあふけつたまをわらふ

あふまふおふあふ野へとけんりし

いりしあふなわなもたのほし

あふさきあふあふあふあふあふあふ

いりしあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

花のさきりらに
 念まそりやて
 後氏懐もいさる
 ゆる我志のて
 母いひにぬれ人
 う志し涙あわに
 なる



毎せらりしとわらふらふに
 志しつたわ
 け神六すまふれと志
 井々らま勢乃神六
 うか舞

さとはふ乃志ふふか
 舞人を得
 あり志しまはな
 されけかも
 かなとくく
 ぬる世や
 ひれ世に
 志はさ
 志し乃
 ぬい花の
 さりらに
 念まそり
 やて
 後氏懐も
 いさる
 ゆる我志
 のて
 母いひに
 ぬれ人
 う志し
 涙あわ
 に
 なる

人々をわかれしをせしむる——たまたまおや
ゆ——あわれむせかものころか見ふし——
久後をたも——いよえん——やむ

よ後うみのあはし——人をいふか——た
め——つせよともたのまは——部

二神ハ神宮乃もの見えまひくる車有
か——あこえ——わん神ハ見え——たかあり

たさひ有——りもとたは——
せ——かこい——くす——ぬる——としひ

やわらむる神の女

志——熱ハけふんたな——むき——

あ——有——ぬく——人もあ——

呪心つちル神ハいふとふり——と思ひは——
心——い——やま——わけあり

お——ね——み——だらの勢——え——志
強う可なりまう——を田川流はとわらむ
ちりやあふ神代もきき——はたつ——かは
——く神みお——りぬく——はとけ



昔あてま流木しこありけわうけ男流りど
 ありけ敷人依内記不しありけりけりり
 水一遊まといり人りりひまありきと
 梅のちのれいへあえぬなきく
 かすすしと遊もソひき了すつじんやまを
 しまさわらけおめのおう一ぬり人あむ
 うさてかきまやわりわめままひり
 雲のさるたののよま

流木しこ乃ながめよまゆるなこ大川

袖乃こひらてあふりーもうー

返ーまいのたそめなりーかりりて

あき忍こころ袖ハひつりめたるへ何

あき入ふかるとまきハたのまん

やいつわん神ハたそいひ伊さうめつ

いまてまきふさこなりいさそあわこ

たせりふたりたそこあをこ勢たわえつ

厚徳こやなわら里あ欠のあわぬへきなり

あめんこ木使ひ付る君市いりひあつ冬

この雨ハふりしといつわりん六世川添男

女下りあふてふかそやうす

かひく小思ひおもを涙とひかこ思

君哉ーは雨はあわうはきまき

あきこころやまひれハこのもかきもさち

あきそ志やこにぬまきまひきたにんち

世ー女人の心をうそん

国あなハとは有り方えこも若あれや

まの衣子乃あふととれたかな

とつ祿のこととてきく可しりひたりをきく
たひ多敷おねい

よぬとたうを祿のあはたぬく田よは
水こころまきまきおめちよ小羅祿叱

むしおねいともたらの人を宇しあ
へ祿かともいにやわく敷

花よわも人こそあこになわたりしき
い祿まきまきたふこひんとか思し

若おやこみううにこころよ女あわたりわうれ

かよとじわこころの愛有りなん思き祿ひ
はつといにわくも下男

思ひあまちあし玉のあ祿ふらん
物ふかく見えハたまむけひせし

むしおねいこやむいこなき女のもとも
かくなわたりし祿をとよふふ屋うらむ
いひやりも敷

いみしハもや志り世今そ志祿
備い思ぬ人をこゝれおねいとは

五

志うひもの志遠くをいふことけなへに
うたふおことえこひすう何故か

又五

意志とハせしよものけし志たひもた
てんを人ハうれと志う者舞

おうーおやこねんい海下りいひちあわ
らぬのいやさまになわふる神ハ
さまれあ海乃志ほやく煙風をいひ

おもるぬかへふたをひきりーらわ
おうーおやこねんい海下りいひちあわ

おのこいぬいのち乃わとに志遠くハ
いのにこいぬいあまらみ遠く

昔仁木遠くかき響り川下りけりかうー
新なる時いまハははこもりをふく思ふ
中もと海をいふことふれをたほの
たかひいさきうりあまもまひく候すわ
あやあぬのたもこいさうけり

おふたをいひ人服と見えうわわ、病も
多しうわとさうたらもななく思ふ

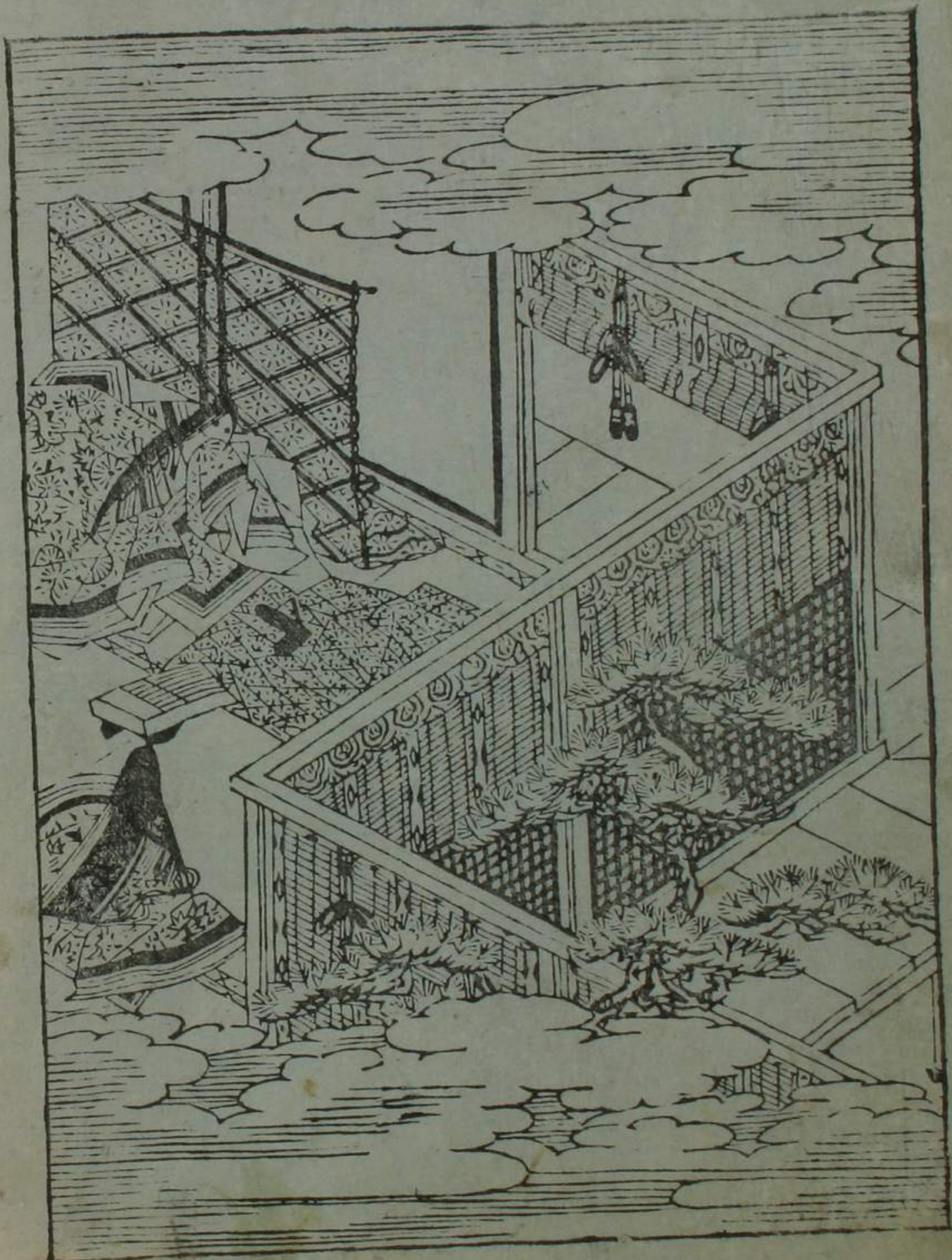
おほやけのほくーきあーりりり星をの
かーりひ夜なひひ流とわのかゝぬ人を
あゝおひりわとや

あーら乃くふにそおと、女はえりり
おと、言こい、おんといふお女
うかーうてむまはえむけをたふと見と
ておきお井々言こーまといふおとくさけ

のまおとよめ家

おきれぬく男はやくうわもほ(ま
まやこーまんのわのれなわらわ
昔おとすくろよみら乃くたまへまよひ
りりりり糸に思ふ人よひひや

なままじわ見ゆるこ志海深えまひき
ひさーくあわぬ君(あひん
服うりりも三服よくなわに思わやたん
ひひやわら



びーたとこ女のまゝよーすとおやぐた
 ぬり人儀酒もにー乃ひてもれまきこえ
 てのちやとるゝ

あふみふりけくはれまらわとくせなせ
 け運なき人のふへ乃ひ忍ん
 びーたやこ梅は保すの雨有りぬきそ
 人のまわりつゝを忍そ

うらひすの花をぬふてふりきもり那
 めるめ故人有りまきをかへそむ

返一

うらひも花をぬぬこふりはいふ
たのひをうけはほしきん

すうー男ちきれうも、あやまきぬ人可

庭に花の井く、落おめて有りむはひ

たのえうーひもなきをなわけわ

花のひやまといつうへもきん

若おとこ、あわらわふりきふはえんはあめ

をよめうーあまかこつうーやたのひん

かゝ候うて候もえんわ

年まへて候うーはと出でてはなる

いふふふおとこ、あまわなま

女

野やふはうつととなわて野をん

あわたりまにやあまいこさ、あま

定まらわらぬふめうーゆるむとあま

なくあまなりらわ

すうーおとこ、伊らなわらぬ、あまを



此の故にありぬるは

思ふ事いふてうらむもやみぬる

我とちと一き人志ふは

苦むこ一見はひはねぬる

しは

清井小舟とてはるる

時白とてはるる

伊勢物語新刊執余需勅按押系換黃
門一軍之奧書云此物語之根源古人之說
不同之如余以天福年取被高孫女書正之
後而於忍有訂按之造欠也又圖書卷中
之坂分以為上下是雖不足勅好為人
駭為之悅雅童眼目而已

慶長戊申仲夏上浣

也是也



